

共に未来を育てるために

# 進路指導の現場から

第5回

生徒に勧めるのは「面倒見のよい」大学

——指導の際、どのような観点で大学をご覧になっていますか。——  
本校には普通科、情報科、体育科の3学科があり、1学年280人の生徒が在籍しています。約9割の生徒が進学を希望し、4年制大学に進学する者は200人程度、そのほかは短大や専門学校に

進学します。近年は特に4年制大学を志望する生徒が増えています。

志望大選択で重視しているのは、面倒見のよさです。言い換えれば、「生徒をしっかりと成長させ、社会に送り出してくれる大学かどうか」ですね。その大学の研究成果や、優れた業績を持つ教員がいるかといった面も当然見ているのですが、実就職率、国家試験等の

合格率にも着目します。「自分たちが育てた生徒が、4年後、どのような姿で社会に出ていくのか」が、最も楽しみなことであり、気になる点でもありますから。

土曜日を活用し、希望進路の実現を後押し

——生徒の希望進路実現のために、「土曜活用」という取り組みがあると伺いました。具体的にどのような取り組みですか。——  
土曜日に学校を解放して、学習支援や、進路選択への視野を広げる講座を開いています。もともとは3年生の受験対策としてスタートしたのですが、前年から1、2年生向けの講座も開催するようになりました。3年生向けは年間30回、1、2年向けは年間6回実施しています。基本的に自由参加ですが、多くの生徒が活用しています。

## 大学への関心を深める機会と学習支援の場を設けています



岡山県立玉野光南高校 進路指導主事 村岡 一典

むらおかかずのり ● 専門教科は理科・物理。同校に赴任して5年目。2014年より現職。「最後の最後まで諦めない」を生徒に伝えながら、指導教諭として、公開授業の計画、実践の指導にもあたっている。

3年生向けの講座は教科ごとの受験対策が中心で、1、2年生向けのものは、基礎学力補強のための講座、大学教員を招いての出前授業、英語検定や情報検定などの資格試験対策を実施しています。出前授業に関しては、大学での学びへの関心を高めるため、土曜活用以外でも行っています。

また、本校は、修学旅行を進路について考える校外研修と位置付け、生徒に首都圏の大学や企業を見学させています。

——最近の高校生の進路選択の傾向に変化はありますか。——

生徒が大学を検討する時期が以前より早くなっていますね。加えて、現役志向が高まり、地元大学へ進学する傾向も強くなってきていると感じます。本校の大学進学希望者の8割程度は、中・四国エリアの大学に進学します。地元を離れる生徒は、「その大学でできない研究を求めている」「地元にはない学部・学科を志望している」といったケースが多いようです。こうした生徒には、エリアを

広げて大学を紹介するようにしています。

——大学の情報はどのような方法で集めていますか。——

中・四国エリアの大学に関しては、直接大学説明会に足を運んで収集し、エリア外の大学に関しては、受験情報誌などを参考にして情報を集めています。得た情報は報告書にまとめ、進路検討会ではかの教員と共有します。これは2年次に1回、3年次に3回、進路指導部の教員と全担任が集まって行うもので、ベテラン教員から経験の少ない教員へ、進路指導のノウハウを伝える機会にもなっています。本校は3学科あるので、学科間の情報共有も大切です。

——「面倒見のよさ」はデータだけでは判断しにくいのではないのでしょうか。——

卒業生が長期休暇中に本校へ戻ってきた際に、話をよく聞きます。実際に通っている本人がポジティブな感想を抱いている大学は、おおむねよいと判断します。

また、大学の教職員の方と直接お会いしたときの印象も参考になり、何げない会話の中からも、



進路指導室での一コマ。教員同士の情報交換は重要。

熱意が伝わってくることもあります。特に学生の教育、キャリアサポートについて熱く語ってください。大学は、信頼できると感じます。

交流の機会を増やし、高大連携の強化に期待

——高校を訪問する大学関係者にリクエストはありますか。——

わざわざ来校いただいたり、直接話す時間を持つても、いつも同じような内容で終止してしまうのは、もったいないと思います。高校教員は授業のほかにも、部活の指導や進路相談に割く時間が多いので、なかなか大学の情報を集める時間を確保できません。特に近年は、入試改革や学部の新設・再編が進んでいて、情報をアップ

デートするのがよけいに難しい。新しい情報は、どんどん提供していただきたいと思っています。

——大学関係者に対するメッセージをお願いします。——

大学の方が高校訪問にいらっしゃると同様に、我々も中学を訪問し、高校での学びを伝えたり、卒業生の近況を報告しています。中学と高校の連携と比べ、高校と大学の連携はまだ弱いように感じます。模擬授業を行う機会を増やしたり、高校教員が大学に向かい、高校での授業の様子を伝えたりする機会を持つなど、もっと交流の場を設けて、親密な関係を築ければと思います。こうした関係強化が、生徒の希望進路の実現とミスマッチの解消につながるのではないのでしょうか。

### まとめ

大学からの新しい情報提供が進路指導の役に立つ

高校は大学との交流を増やすことを望んでいる

### 高校訪問 ワンポイントアドバイス

#### 訪問する高校の昼休みの時間は事前に確認を

昼休みは本来、教員にとっては食事休憩の時間なのですが、実際は添削指導や生徒からの質問の対応にも時間を割いています。つまり、教員と生徒にとって重要な時間です。そして、大学の方に、お会いしてお話や情報交換ができる時間でもあります。だからこそ、昼休みの時間帯は高校によって異なりますので、事前に調べておくとういでしょう。

## 長崎県立大学 経営学部国際経営学科



経営学部国際経営学科長  
**岩重 聡美**

いわしげさとみ ● 福岡大学大学院商学研究科博士後期課程単位取得満期退学。2008年、長崎県立大学経済学部教授。2012年、同学部流通・経営学科長。2016年より現職。専門は消費者利益と流通システム。博士(国際学)。

### 国際経営学科の学びの特長

語学研修	【実施時期】1年次(必修) 【期間】約3週間 【概要】フィリピン・セブ島での短期語学留学。現地講師とのマンツーマン授業で、外部英語検定平均スコア100点アップをめざす。参加条件は外部英語検定スコア600点以上
海外ビジネス研修	【実施時期】3年次(必修) 【期間】約3週間 【概要】シンガポール、ベトナムなどの現地企業、日系企業等での就業体験を通し、英語でのコミュニケーション能力を高める

取材・文／本間学 撮影(岩重聡美学科長)／南弘幸

一步先を行く大学に聞きました!

## ハードな英語教育を課して 国際舞台に立つビジネスパーソンを育てる

ビジネスで通用する  
英語力養成をめざす

「この学科が育成をめざす人材像を教えてください。」

国際経営学科は、2016年度の全学的な改組に伴って新設された学科で、1学年の定員は60人です。

本学科でめざすのは、「国際的に活躍するビジネスパーソン」の育成。異なる言語、文化、歴史を持つ人々と、英語を通じて対等に

コミュニケーションが取れる人材を育てたいと考えています。

そのため、まずは頭も心もフレッシュな1年次に英語を集中的に修得させるようにしています。

というのも、厳しい交渉が求められるビジネスの現場においては、プロクンイングリッシュでは通用しないと考えているからです。「話す」だけでなく、「聞く」「読む」「書く」といった4技能の基礎的な英語力を身に付けることは大変重要です。

2度の海外研修が必修

厳しい環境で学生を育てる

「英語力向上のために、具体的にどのような教育を提供していますか。」

特徴的なのは、海外研修を2回、必修としている点です。1回目は、1年次の夏休みにフィリピン・セブ島で行う語学研修(3週間)です。これに参加するためには外部英語検定試験で600点以上を取らなければなりません。土台がで

の指導に定評のある専門家に頼んだほうが、成果が上がると考えました。

セブ島での研修では、フィリピン人講師との会話や少人数でのディスカッションを通して、英語で考え、発信する力を養います。授業や模試、自習に取り組む時間は1日10時間以上。日曜日以外は英語漬けの毎日です。1期生の成績を見ると、入学時は435.7点だった外部英語検定試験の平均スコアが、研修後は692.2点にまで伸びました。

2回目の海外研修は、3年次での3週間程度のビジネス研修です。これは、シンガポールやベト

ナムなど、東南アジアの企業で就業体験をするプログラムです。グローバルに活動する企業の現場を肌で感じるとともに、ビジネスで使える高いレベルの英語力を身に付けるのが狙いです。

「英語力の指標に外部検定のスコアを用いている理由は?」

外部英語検定によって、学生自身に自分の英語力の伸びを客観的に把握してもらいたいという意図があります。加えて、私たちが行っている教育の成果を社会に発信する際、数値として活用しやすいからです。また、海外研修先の企業に対する、学生の英語力を保証するデータとしても使っています。

教職員が連携して

学生の目標達成をサポート

「海外語学研修の準備は、苦労が多かったと思います。」

研修のプログラムは、現地の語学学校のスタッフと何度も協議して完全オーダーメイドのカリキュラムをつくりました。語学学校にはビジネスパーソンに必要なスピーキングとリスニング、ライティングを徹底的に鍛えてほしいとリクエストしました。安心できる場所で勉強させたかったので、周囲環境から食事に至るまで、細心の注意を払って寮を決めました。

海外ビジネス研修の企業開拓に関しては、私を含め、学科の教員と職員が現地に赴いて、企業と直接交渉もしています。すでに決まっている研修先はシンガポールに10数社、ベトナムに20社程度。今後はタイにも広げる予定です。

「初年次からかなりハードな英語教育を行っています。どのようなフォローをしていますか。」

今のところ脱落者は出ていませんが、「こんなに英語ばかりで苦しい」と悩む学生はたくさんいます。学生は私たちの宝ですから、丁寧なフォローも欠かせません。面談をしたり、教職員から積極的に声を掛けたりするようにしてい

ます。数日大学に来ないようなら、自宅まで様子を見に行くこともあります。万が一、夏までに語学研修の参加条件を満たせなかった場合でも、努力を続けてスコアをクリアしたら、春休みに参加できるチャンスを用意しています。

「今後の展開について教えてください。」

1期生はまだ、英語の勉強が中心ですが、この先は専門講義が増えていきます。改組前の教育とは少し視点を変え、「国際」という観点を重視し、常にホットなニュースとフレッシュな理論を積極的に授業に取り入れていく予定です。

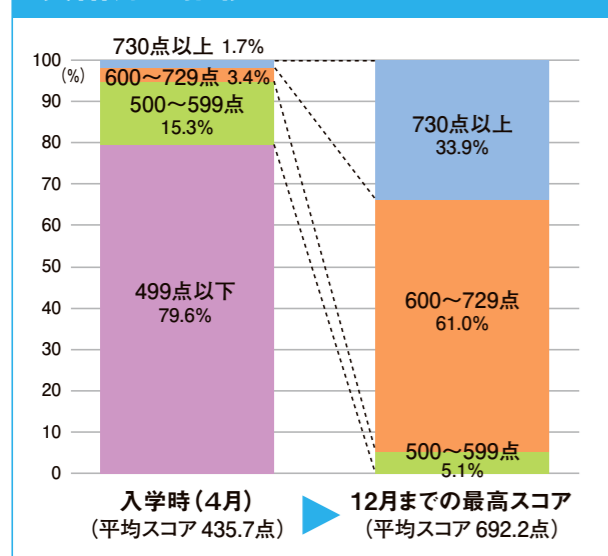
最終的に私たちが提供しなければならぬのは、学生が望む就職先です。勉強面でも費用面でも多くの負担がかかっている学生に対して、「これだけ教育したのだから、就職は勝手にしてください」とは絶対に言えません。本学科の教員には、研修先企業の開拓のときも、就職先としてつなげられないか、常に頭においてほしいと伝えています。

幸い1期生は、それぞれ具体的な将来像を明確に持っています。彼らが社会に出て活躍し、後輩たちのモデルケースとなってくれることを期待しています。



セブ島での語学研修の様子。午前中はフィリピン人講師によるマンツーマン授業、午後はグループ学習、夕食後は自主学習というスケジュールで、午前9時から午後9時まで学習する。

### 国際経営学科1期生(60名)の英語力の推移





とべ・じゅんいち ● 1951年神奈川県生まれ。1975年東京大学文学部卒。1978年同大学大学院人文科学研究科修士課程修了。1983年同研究科博士課程単位取得退学。1994年成城大学文芸学部助教授。2001年同教授。同学部長などを経て、2016年から現職。専門は西洋古典学。



荒波に挑むトップ  
**私の改革論**  
No.18  
成城大学・学長  
**戸部 順一**

# 教育方法を転換し 「懸命なる若者」を育成する

〜教育改革によって学び合う風土を醸成し、他者理解への扉を開く

## 高等教育問題の根本は 大学と社会との関係

大学は社会の共同体の一部ですから、社会には大学に何らかの期待があります。一方で、大学は高度な専門的知見を生み出すことが義務づけられ、それを若い世代に教授するという、普遍的な役割も

担っています。この社会からの要請と、大学が伝統にのっとって提供している教育との間に何らかの乖離が生じたときに、高等教育の問題が顕在化するのです。

例えば現在、社会は大学に対して、人材育成機関であることを強く求めているように見えます。企業をはじめ、社会の各層で活躍で

す教育方法の開発は、現代の大学の重要なテーマと言えます。

大学の教養教育も再考するべきでしょう。ギリシャの哲学者ヘラクレイトスは「博識は考える力を生まない」との言葉を残していますが、私は、教養とは幅広い知識ではなく、物事の本質を捉えて、判断する力だと解釈しています。すると、教養教育は広範囲な科目群を用意するだけでなく、1つのことに一生懸命取り組ませて、本質に到達するような教育もすべきなのです。

## さまざまな教育改革で 学び合いの風土を作る

学校法人成城学園は、2017年に創立100周年を迎えます。そこで、次の100年へのビジョンを策定し、「第2世紀の成城教育」を掲げ、教育改革を中核にさまざまな改革を推進中です。

とりわけ力を入れているのが、初年次教育において、教育方法の転換を図ること。アクティブ・ラーニング型の授業を多数導入し、「懸命になる」ことを学生に経験させようとしています。

組織的なFDにも取り組み、教育力の向上を図っています。一例を挙げると、学生から評価の高い

教員の授業の取り組みを冊子にまとめて共有しています。

また、教育イノベーションセンターでは、2017年度から「ピアチューター制度」をスタートさせます。これまでも学生がボランティアとして他の学生を教える授業はありましたが、それを全学の制度にし、「学び合い」の風土を根づかせようとしています。

## 他者理解と語学教育で 国際教育の内容を拡充

国際教育に関しては、グローバル化の潮流に流されるのではなく、建学の理念に沿って拡充していきます。特に重点をおくのが「他者理解」の観点です。人種や民族による視点の多様性に限らず、特定のテーマにもさまざまな見方があることを学び、自分とは異なる世界への扉を開かせるのです。

例えば文芸学部の「文芸講座」では、1つのテーマを1教員ではなく6学科の教員がオムニバス形式で講義することで、他者の視点に気づかせる工夫をしています。

語学教育も2017年度から拡充させます。学部での専門教育とリンクした「読む・書く」中心の教育と並行して、「聞く・話す」中心の全学的な英語教育「SIEP

きる人材に必要な能力を、大学が育成することに大きな期待を寄せています。国民の付託を受ける形で文部科学省も、グローバル人材育成を重視した大学教育へと転換を図ろうとしています。

ただ、ここで危惧されるのは、一色に染まりがちな日本人の国民性です。多様な価値観が共存する

(Seijo International Education Program)を、本格的に開始します。これは、留学や海外インターンシップを目標に、その準備を通じて語学力の向上を図るものです。このほか、日本語を初歩から学べるプログラムを導入して、海外留学生の増加を図るとともに、学内の国際化も進めていきます。

## グローバル研究を柱に 研究ブランドを確立

研究力の強化にも注力します。具体的には、2016年度の文部科学省の私立大学研究ブランドディング事業タイプB世界展開型に採択された、「持続可能な相互包摂型社会の実現に向けた世界的グローバル研究拠点の確立と推

共生社会の実現が望まれているにもかかわらず、大学教育をグローバル化という一色だけに染め上げてしまっているのか、考える必要があるでしょう。

この問題は、古くからある研究と教育のバランスの問題と同根と言えます。学問的な興味に端を発した自由な発想による研究の深化と、社会が求める人材を輩出する教育のあり方との関係は、時代の変化とともに常に変化します。社会の要請に応えつつ、大学本来の役割をどう貫くのが、各大学に問われているのです。

## 変容した進学者層に 対応する教育方法を

少子化と進学率上昇への対応も、日本の高等教育が抱える課題の1つです。18歳人口が減少する中で大学の入学定員は増え続け、以前は大学に行かなかった層が進学し、目的意識の希薄な学生が増えてきました。この層は積極的な学びへの意欲が低い傾向にあるため、教育方法を大きく転換する必要が出てきました。

そこで、近年、注目を集めるのがアクティブ・ラーニングという教育方法です。学生に授業を楽しみと感じさせ、積極的な参加を促進」を、本学の研究活動の柱に育てていきます。

これは、本学が蓄積してきたグローバル研究がもたなくなっていきます。現代社会が直面するさまざまな課題を改善する取り組みの一環として理想的な未来社会を構想し、その社会の実現に必要な新たな人間像を提示しようという研究です。この成果を発信し、世界レベルのグローバル研究拠点をめざしていきます。

数々の改革を成し遂げるには学長のリーダーシップが不可欠です。私は、アメリカのトップダウン型と、日本の集合知を重視するやり方を融合し、人の話をよく聞いたうえで最終判断を下し、その結果に責任をとるというスタイルでいきたいと思っています。



\*複雑さを増す現代では、世界的な課題がローカル化すると同時に、ローカル固有の課題もまた容易にグローバル化する。ローカル化とグローバル化は同時かつ相互に影響を及ぼしながら進行、浸透、拡大する。両者の相互作用の下で形成される多様・多元・多層的な価値観の共存する未来社会 (=相互包摂型社会) の実現をめざし、それを支える人と社会の実践原理を解明する研究を「グローバル研究」としている。